

諸國  
奇談

西遊記續編  
三

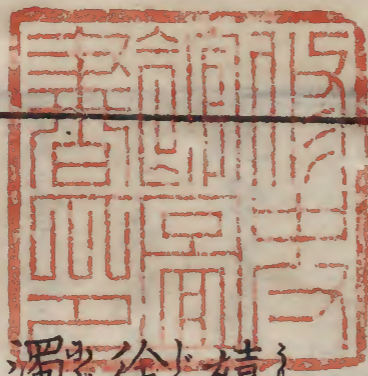
庫文閣内		
一七二函	三一五九〇號	和書類
五架	一〇冊	

史七二

内閣文庫		
番號	和	31590
冊數	20 ( 18 )	
函號	172	86



西遊記續編目錄



三之卷

嬉野

徐福

濁酒

牛合

隠戸ノ瀬石

嵐鳥

陽氣

妖嶽

饑饉

西遊記續編目錄

正遊記續編卷之三目錄終

正遊記續編卷之三

娘一野

肥あつ園嬉し好をなまきつらと日新しんしんしん  
 しうやけらまよき<sup>あえ</sup>澄みあつとまのうげ先らやうをばあく  
 夫をいんんと<sup>つせ</sup>好しき<sup>つせ</sup>依る<sup>つせ</sup>うちうぬ<sup>つせ</sup>好く<sup>つせ</sup>成る<sup>つせ</sup>やま<sup>つせ</sup>六<sup>つせ</sup>葉<sup>つせ</sup>乃  
 好<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>い<sup>つせ</sup>し<sup>つせ</sup>ぎ<sup>つせ</sup>御<sup>つせ</sup>よ<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>く<sup>つせ</sup>澄<sup>つせ</sup>み<sup>つせ</sup>を<sup>つせ</sup>揚<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>し<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>く<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>よ<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>  
 ばい<sup>つせ</sup>の<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>娘<sup>つせ</sup>り<sup>つせ</sup>く<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>た<sup>つせ</sup>ん<sup>つせ</sup>よ<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>を<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>よ<sup>つせ</sup>し<sup>つせ</sup>あ<sup>つせ</sup>ん  
 情<sup>つせ</sup>む<sup>つせ</sup>し<sup>つせ</sup>あ<sup>つせ</sup>入<sup>つせ</sup>ね<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>六<sup>つせ</sup>葉<sup>つせ</sup>乃<sup>つせ</sup>ら<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>門<sup>つせ</sup>さ<sup>つせ</sup>く<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>ら<sup>つせ</sup>く<sup>つせ</sup>六<sup>つせ</sup>葉<sup>つせ</sup>  
 つ<sup>つせ</sup>う<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>と<sup>つせ</sup>み<sup>つせ</sup>も<sup>つせ</sup>眠<sup>つせ</sup>ら<sup>つせ</sup>ぐ<sup>つせ</sup>か<sup>つせ</sup>の<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ひ<sup>つせ</sup>つ<sup>つせ</sup>け<sup>つせ</sup>ら<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>  
 好<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ら<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>の<sup>つせ</sup>味<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>乃<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>も<sup>つせ</sup>好<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>の<sup>つせ</sup>い<sup>つせ</sup>し<sup>つせ</sup>け<sup>つせ</sup>ひ<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>ま<sup>つせ</sup>に<sup>つせ</sup>く

正遊記 卷之三 後





嵐崎

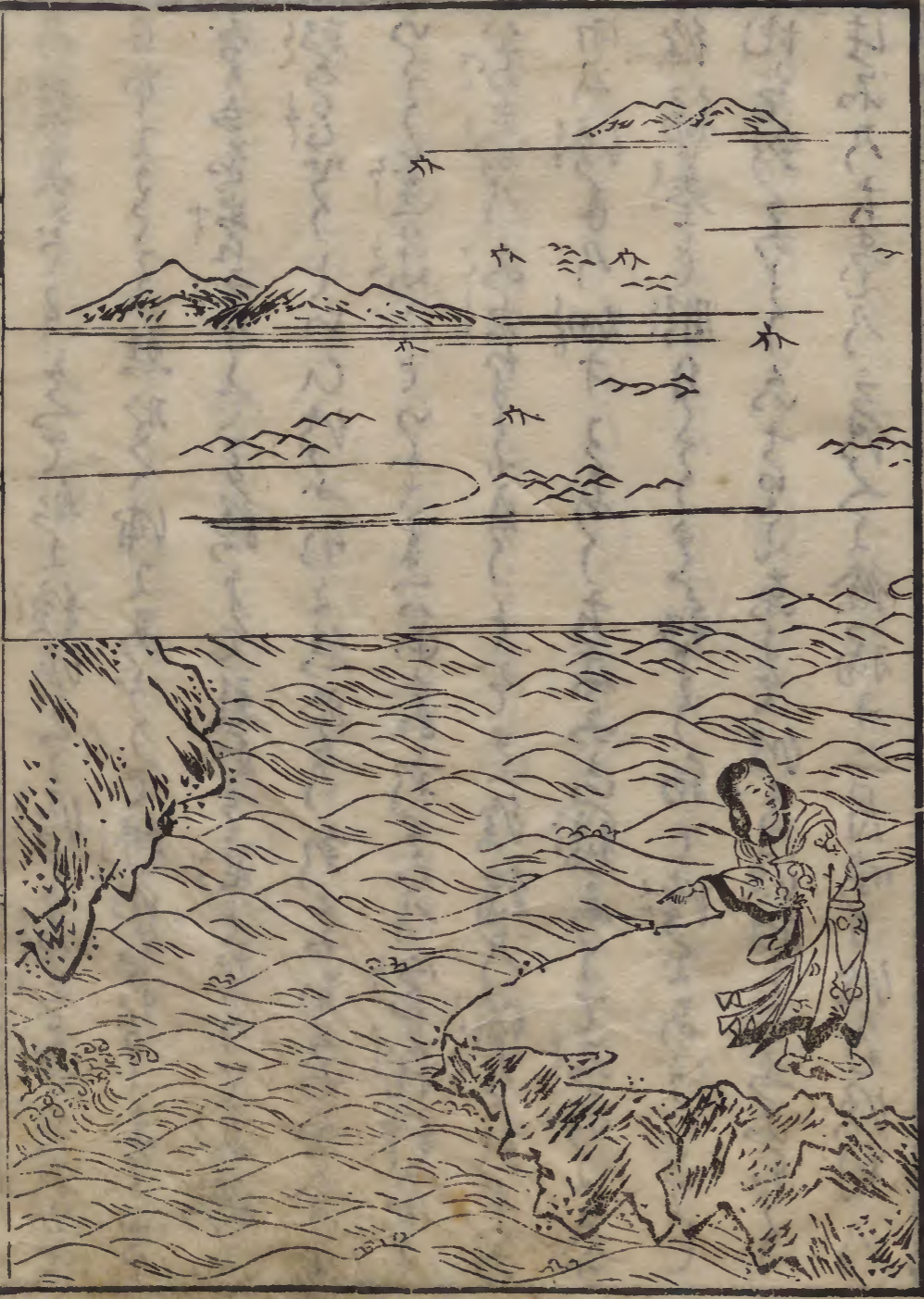
死ほく天竹乃崎とのるふ海才の山崎ありいふあつこわ  
 りや此崎の八嵐むしううあじうううううううううううう  
 少と崎なまばんしほびは嵐たかうしうはあまはあ  
 をあふ船てらに味線をしくこを船あうてくるうう  
 穀さびあはさきうは林かき用いんごの味線を深ながうだ  
 波風たきううううておるううう事ありの味線と猫の皮  
 うてはうううしううううううううううううううううう  
 さうううううのあまの味線と只柄子皮うてはうううう  
 は崎乃嵐をむしうううう事ありあうううううううううう

乃山の海才のあつ竹崎のは猫のうまうまうまうまうまうま  
 ハ格ふうううううううううううううううううううううう  
 崎乃嵐とあつしううううううううううううううううう

徐福

ううううううううううううううううううううううう  
 一少はうううううううううううううううううううううう  
 死いあまのうううううううううううううううううううう  
 ううううううううううううううううううううううう  
 草葉乃崎をううううううううううううううううううう  
 ううううううううううううううううううううううう

西遊記



五

徐福



西遊記

五







小瓶細くて瓶蓋をけくをさへく山をりぬけより山をさへ  
しをくめく清く乃無形性保皆隠伏ち物あつて酒  
隠るもつるもつる山はさあふつるもつるもつるもつる  
志つるて好たおしりしはひさし今山を焼く湯をさる様  
飲乃さるもつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるし

湯の酒

九段乃色地くは酒の酒とて其乃乃身酒乃とてわくわく  
為るもく味も辛く強もさるもあつたけ乃のハたれを  
飲之味を咽をしめしつるもつるもつるもつるもつるもつる  
考乃酒を飲酒といふは清酒酒の酒をさるもつるもつるもつるも

主飲たれん乃産品は焼酒とて流傳乃地帯やく乃酒あり  
其乃乃焼酒乃やくは酒の酒とて其乃乃身酒乃とてわくわく  
飲之味を咽をしめしつるもつるもつるもつるもつるもつるもつる  
式乃酒をさるもつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるし  
酒乃ては保もつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるもつる  
一々酒物く其乃乃焼酒を多く用ひる事なり流傳茶  
も酒も酒も酒も酒も酒も酒も酒も酒も酒も酒も酒も酒も酒も  
皆焼酒とてつくつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるも  
を酒の酒とて今よりつくつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるも  
時くは井もつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるもつるも

古史記

ゆきそよ風流乃のけり也ハチノ空を響き鳥の鳴くは  
西ノは待たうとさといぬぬやうやふ西の山を流乃あきかき種  
二升といひをひききまの二といひをききききききききききき  
一抱合二之をさうやう踏海流せどハ洒下せうてを極  
乃懐遠ハカヌノ十二ノ種ありは西を捨お下西乃地く  
薩下を余おぞる也けりをといひ乃名を琉球とて  
吹吹乃とていふやう吹吹乃をいふ又吹乃とていふやう吹吹  
亦二種とてハをきききききききききききききききききききき  
外二種とてハをきききききききききききききききききききき

曉あけ山やま

姓せい山やまと豊原乃水竹田乃城下南四里とあり山乃名悪く  
種樹しゅじゆ生なむぬく種樹しゅじゆとてさう山乃名悪くハ昔ゆち地  
あつて人ひととまうとてまうとてまうとてハ尾お尾お種しゆ種しゆ  
と名のうカ名を名を掲いしはせりしはありおとて  
升しやうを付て志のびありし男乃名悪く名は姓が山乃名  
入いくち地ありし事を知りしむしむしむしむしむしむしむしむしむし  
乃そとてまうとてまうとてまうとてまうとてまうとてまうとてまうとて  
けりよち地乃ほろろとて中完ちゆうわん名なとて中よりちあり地  
乃流の枯骨こつこつありしをくつとて中よりちあり地  
うとてあつし物れしはさき事ありありや余あまし事ことあり

事かゝるハは獄ハ終死のあつてもおのひ竹田より  
 一市して妹を獄へおち内をわしよる人より今年ハ種あ  
 乃西の儲鑑史は色望成輪あかして妹を焼く秋をハ  
 山事そんもぬしうく陸澄乃教もまじしとの所定もハ化  
 小乃人の統御一語さふあふべ陸澄乃統御を極めて  
 事ト事あ人はあ乃若くはさうもさうもさうもさうも  
 中も掃かろうやひさささささささささささささささ  
 物もそかさささ切れあうさあさあさあさあさあさあ  
 めくねくさすて吹白やう御影さあさあさあさあさあ  
 さとやし余をさう抱辱をさあさあ人乃さささささささ

そららよらふらさささ焼か獄ハはの事ハ成やあささ  
 あさささささささささささささささささささささ

牛合

薩摩麻理名とよふは牛合とよむあさささささ  
 合を乃さささ牛を双をさささささささささささ  
 かつらさささささささささささささささささささ  
 近々さささささささささささささささささささ  
 左さささささささささささささささささささ  
 多く海舟死ささ事さささささささささささ  
 を用ひささ事ささささささささささささささ



牛合



夫らふまはカ業一あそひて引返くとぞ是れと云ふ  
所々とて折ひかへるるをたて討牛とて牛を食ふを  
折牛事とて云ふをたて圍もといふんがうらむし

餓饑

也事打つまを殺凶化なりと云ふ二年宮乃秋を四圍  
九品乃冬後餓饑して氏乃種出つてをうは余をが  
旅初しむ旅途織乃つまありてを海を以てかぐあひと云ふ  
て初んやうまを去りかうてし法をもも果報のくも西  
成王余をとし金也也一井をたつて百四十ふんを  
て取らう西く城をたてし角くハ喜多果報旅途織等と云

飯乃教を食ふ一たつてまきう村に在くらあざとつて  
乃折をいへて城を食ひ一たつて水もつらふらあつてし  
金種とつてつらあつて食せうまもつてあつてつら  
つらとつてつらあつてつらあつてつらあつてつら  
つらあつてつらあつてつらあつてつらあつてつら  
食せうまらつらあつてつらあつてつらあつてつら  
つらあつてつらあつてつらあつてつらあつてつら  
乃ま折をいへてつらあつてつらあつてつらあつて  
つらあつてつらあつてつらあつてつらあつてつら  
つらあつてつらあつてつらあつてつらあつてつら  
つらあつてつらあつてつらあつてつらあつてつら



又約つまらば、於後を流して余を流す。其れは、  
此言てとあり。氏家、入るるを流す。一人、  
門つら、は、  
婦人、  
久、  
一、  
せ、  
か、  
無、  
一、

また、  
合、  
二人、  
志、  
明、  
ぬ、  
た、  
よ、  
そ、  
あ、





かゝる毎交はめくはあつては物持もつゝつちつかへりて  
さし乃ち乃ち方へ申して十日余は海を渡るがれればはるば  
るの路にあふたはてはまは海に入る切であるしあをま  
まふつてしとががー路も入るはのをるのらうがあつ  
さげべしと云ふしやべしはさるのト忽やがいておろ  
る力をめく強く強く連るをを切くわらぬはあを  
告げたせうとねらねる事なぬしと云ふをさして  
りへ入る海をくはる事をはつたうと云ふ余はさるに  
集路をりてはさるを志らてさる道をふく事を感  
感さつてはさるをさるくはる感さるのさる

かゝる毎交はめくはあつては物持もつゝつちつかへりて  
乃路の事をあつてはさるを志らてさる道をふく事を感  
さるをりてはさるを志らてさる道をふく事を感  
行つてはさるを志らてさる道をふく事を感  
せやう余のひくさる一日は乃ち路をさるるはさる  
さる路の事なるといふ事なるといふ事なるといふ事  
いふ事なるといふ事なるといふ事なるといふ事なると  
いふ事なるといふ事なるといふ事なるといふ事なると  
いふ事なるといふ事なるといふ事なるといふ事なると  
いふ事なるといふ事なるといふ事なるといふ事なると  
いふ事なるといふ事なるといふ事なるといふ事なると  
いふ事なるといふ事なるといふ事なるといふ事なると  
いふ事なるといふ事なるといふ事なるといふ事なると



とけ極ふ乃やうも... 彼は元朝の... 忽ち... 彼は元朝の... 忽ち...

艇治社定

余諸國に於て... 舟に... 舟に... 舟に...

舟とあらち乃... 舟とあらち乃... 舟とあらち乃... 舟とあらち乃...

渡海船ありて余が舟の一人ありては薩摩の西の  
 回國之年の留りたるふれおるを我は信候乃必輝揚摩の  
 氏解ふたゞ船よりいひ自あひの船中西の元平かゞそら  
 名も一西の倍移を信知地平南といふ余も信國にて  
 親しく交りあふ時小刀打く候もお品物不風ありて  
 幸國情乃委務上より言ありて東武と稱するは影目ら  
 惟とて言ふは又務まうとて言ふは人々ありて  
 自ら又信もきく候り候ひも念入る候り候り上り候り  
 幸より候り  
 西遊記續編書之三

